

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820072

研究課題名（和文）

更新世末期における社会変化の研究

研究課題名（英文）

The research of social changes in the last Pleistocene

研究代表者 国武 貞克（KUNITAKE SADAKATSU）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：50511721

## 研究成果の概要（和文）：

旧石器時代終末期から縄文時代にかけての社会の変化について研究を行った。その方法は、石器の材料となる石材の獲得方法がどのように変化したのかを調査した。具体的な研究資料としては、関東地方を中心とした東日本の出土石器と石材データを主な分析資料として利用した。また栃木県高原山黒曜石原産地遺跡の調査により、縄文時代草創期の大型の石槍製作址を発見し、旧石器時代の資源獲得方法を調べる上で貴重な成果を得ることができた。

## 研究成果の概要（英文）：

This research aimed to reveal the social changes in the term of transition from Pleistocene to Holocene in the eastern Japan. The method of this research is to analyze stone query strategies by hunter-gatherer. Stone tools and debris from the eastern Japan, mainly Kanto Plateau, Paleolithic sites and raw material from same areas are main material to analyze. And workshops of big size spear points in concerned term could be found in research of Takaharayama obsidian resource sites in Tochigi prefecture. This could be good sample to analyze strategies of recourse acquisition in Paleolithic age.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：(1) 更新世末期 (2) 社会変化 (3) 居住形態 (4) 石器石材 (5) 石材獲得戦略  
(6) 石材消費戦略 (7) 移動領域 (8) 高原山黒曜石原産地遺跡群

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 完新世初頭の社会は、世界的にみると定住社会に移行する特徴があり、日本列島でも世界に先駆けて、定住の兆しがみられる。この変化プロセスは、完新世になって突然始まったものではなく、更新世終末期の長期間にわたるプロセスを経て達成されたものである。また、定住化に向けたひとつの決まったプロセスを経由したものではなく、長期的には温暖化の傾向にはあるものの、短期的には不安定な気候変動とそれに応じた地域資源の変動に適應した結果であり、まさに人類の温暖化への適應過程である。

日本列島においてもこのような変化は例外ではなく、後期旧石器時代を通じて不安定に変動する気候と環境に対する地域的な適應を積み重ねて、縄文時代の本格的な部族社会へと発展したことが予測される。

(2) このため、定住社会にいたる更新世終末の地域的な社会変化を追求することは、先史考古学上の重要な課題である。

しかしながら、このような変化プロセスを統一的な方法論で具体的に明らかにされた研究成果は、現在のところ認められない。居住形態の変化あるいは連続性などを個別に取り上げる研究はあっても、居住形態の変化を無批判に社会変化と同一視する例が多く、理論と方法に矛盾と飛躍のある議論が多い。第四紀研究成果を参照すると、単純で一方向的な環境変化は想定できないため、資源や環境への具体的な適應方法の表れであるセツルメントの変化を社会の変化と同一視することは方法論として問題がある。このため単純な居住形態の変化を積み上げて、社会変化とする議論はもはや有効ではないことは明白である。

(3) 居住形態の変化を動機づける原因を資源獲得方法の変化におくという議論は、申請者が長く培ってきた居住形態論の基本であるが、この方法論を後期旧石器時代終末期から縄文時代初頭にかけての時期に適用して、定住化プロセスを追求する研究は行っていない。

## 2. 研究の目的

(1) このプロセスが具体的に明らかにされたならば、日本の完新世以降の社会構造の史的变化についての特殊性と、世界史的な普遍性に関わる重要な視点が得られると予測さ

れる。また、社会変化を実証的かつ統一的に検討するためには、各時期の居住形態の変化を追跡し、かつその変化の原因を資源獲得方法の変化という視点から分析する視点が有効であるが、日本ではそのような試みはほとんど行われてこなかった。

(2) 本研究課題では以上の問題の重要性に着目して、日本における後期旧石器時代後半期から縄文時代初頭までの居住形態を詳細に明らかにし、定住生活に至る更新世末期の社会変化を解明することを目的とする。とりわけ後期旧石器時代終末期から縄文時代草創期にいたる社会変化の分析を中心に据えたい。

## 3. 研究の方法

(1) 研究現状から判断すると、これからの日本先史時代研究では、縄文時代に想定される部族社会及び定住社会の成立を、旧石器時代以来の社会変化の到達とみなし、その社会変化のプロセスを統一的な視点から実証的に解明する研究が求められている。既に述べたように申請者は、旧石器時代前半期を中心とする居住形態の高精度分析と、その史的展開を対象とした歴史的・生態学的研究について一定の成果を上げている。

(2) そのために、本研究の第一の方法は、まず後期旧石器時代後半期にあたる最寒冷期から、縄文時代初頭にあたる完新世初頭までの各細別時期の居住形態を、行動論的な視点から高精度に分析することである。その方法は、具体的な移動領域や移動ルート、及び集団サイズや離合集散の検討を通じて、各細別時期の人類集団の居住行動についての古

民族誌的な理解を目指す。

(3) 第二の方法は、各細別時期の居住行動モデルを、変動する環境に対する適応の結果とみなし、その通時的な変化を歴史的に評価することである。その方法は、居住形態の変化から推定される社会の変化を、資源獲得行動の変遷という視点から連続的かつ具体的に抽出することを試みる。

(4) 本研究では、最寒冷期以降の旧石器時代後半期から完新世初頭の縄文時代初頭にかけての、居住形態の高精度分析と、資源獲得行動の歴史的な変遷から抽出される社会の変化を明らかにすることを目的とする。扱う地域と資料は、関東地方を中心として、東海地方から北陸・東北地方にかけての本州北東部の石器を中心とした考古資料と、同じ地域で収集する岩石データである。すでに述べた研究目的にしたがって、以上のような研究方法を適用した結果、以下のような成果を得ることができた。

#### 4. 研究成果

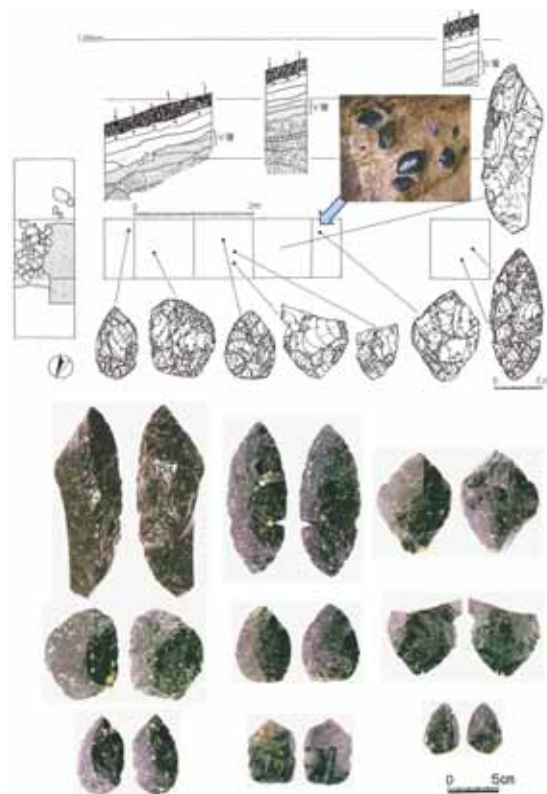
##### (1) 平成 20 年度

本研究の第一の目的は、まず後期旧石器時代後半期にあたる最寒冷期から縄文時代初頭にあたる完新世初頭までの各細別時期の居住形態を、行動論的な視点から高精度に分析することである。その際、具体的な移動領域や移動ルート、及び集団サイズや離合集散の検討を通じて、各細別時期の人類集団の居住行動についての古民族誌的な理解を目指している。本年度は、これまでの研究で消費石材の構成から居住形態の変化について分析が完了している関東地方と比較する形で、東海・北陸・東北地方の石器石材データを収集し分析を行った。また、近畿地方にて関連する資料の調査を行った。これと併行して関東地方の旧石器時代の主要な石材産地である栃木県高原山黒曜石原産地遺跡の発掘調査を行った。その結果、七ノ沢源頭部のトレンチでは層厚 3 m 以上の石器包含層が検出されパミスと出土石器から包含層の下半部は旧石器時代に遡る可能性がある。また八ノ沢枝沢 A 源頭部のトレンチでは、縄文時代草

創期の大型尖頭器の製作址が検出された。

図：高原山黒曜石原産地遺跡群の縄文時代草創期の石槍製作址と出土石槍

この時期の大型尖頭器製作址が高原山黒曜石原産地遺跡群で検出されたのは初めてであり、全国の黒曜石原産地における事例と比較しても貴重な例である。本研究課題である更新世終末から完新世初頭にかけての社会変化を、石材獲得戦略の変化から検討するためにも、大変貴重な資料が得られた。そこで今年度は、この資料の基礎整理を行った。資料の基礎的な分類、選別を行い、尖頭器製作関連資料を抽出して、図化し、概略の報告を行った。また、関東、東海、中部、北陸に分布する旧石器時代の高原山産黒曜石製石



器の分布から、旧石器時代における高原山産黒曜石の獲得からみた地域集団間の関係と移動ルートについて分析を行い仮説を提唱した。そしてこの成果を石器文化研究会主催のシンポジウムにて発表した。

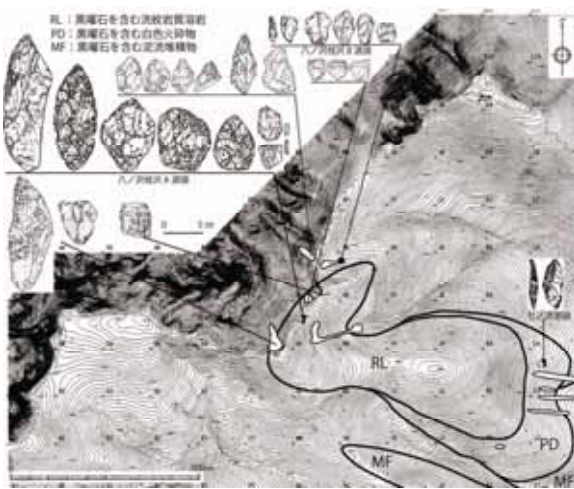
##### (2) 平成 21 年度

本研究は、旧石器時代の移動生活を基本としたバンド社会から、縄文時代の定住生活を基本とした部族社会に至る社会変化を、居住形態の変化を追跡する視点から解明することを目的としている。本年は、関東地方の旧石器時代の主要な石材産地である栃木県高原山黒曜石原産地遺跡の発掘調査を行い、後期旧

石器時代初頭に遡る石器群を検出することが出来た。この資料の整理作業と分析は今後の課題となった。

また、平成20年度の発掘調査で検出した、縄文時代草創期の大型の槍先形尖頭器の製作址の資料を詳細に整理し報告した。そして、このデータをもとにして、更新世末期から完新世初頭にかけての資源獲得行動からみた社会変化についての論考を作成した。またこの研究成果をもとにして、一部を関東地方の資源利用の実態の一例として公開シンポジウムで発表した。また高原山黒曜石原産地遺跡群の最新の調査成果をまとめて、考古学ジャーナに発表した。

ほかに関東地方から近年出土した旧石器時代前半期の資料の資料調査を実施し、これまで作成したモデルの検証を行った。現在、これらの新たに獲得したデータをもとにして、より詳細な居住行動モデルを検討する手がかりが得られた。



図：高原山黒曜石原産地遺跡群の中心部の構造

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

国武貞克 2008 「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』第4号83 - 98 査読有

国武貞克 2008「関東平野及びその外縁部における高原山産黒曜石の利用について」『石器文化研究』89 - 93査読無

国武貞克 2008 「石材環境からみた移動=生業領域論」『伝播を巡る構造変動』8 - 13 査読有

国武貞克 2009 「高原山黒曜石原産地遺跡群の現状と課題」『考古学ジャーナル』585 14 - 18 査読無

国武貞克 2009「関東地方北部(高原山)の黒曜石利用 - 原産地の開発と平野部における消費について」『黒曜石が開く人類社会の交流』70 - 85 査読無

[学会発表](計2件)

国武貞克ほか「栃木県矢板市 高原山黒曜石原産地遺跡群2007年度の調査成果」日本旧石器学会第6回講演・研究発表 2008年6月21日 首都大学東京八王子キャンパス

国武貞克 「高原山黒曜石原産地における黒曜石の利用」公開シンポジウム黒曜石の流通からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容 2009年11月8日 首都大学東京八王子キャンパス

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

国武 貞克 (KUNITAKE SADAKATSU)  
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員  
研究者番号：50511721

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：